

遙か古代より、宇宙は“人類の夢”であり、“いのちを考える場所”としてありました。科学の進歩により次々と未知の世界が解き明かされている現代においてもなお、宇宙は私たちの好奇心を限りなく刺激すると同時に、無限への畏怖を教える存在としてそこにあります。「宇宙連詩」は、宇宙について、地球について、^{いのち}生命について、国境、文化、世代、専門、役割を超えて共に考え、「連詩」を通して協働の場を創出していくという試みです。

「連詩」は、詩人・大岡信氏により、日本伝統文化の連歌・連句を発展させて生まれた形式で、世界中に広められてきました。その大岡信氏を進行役に、インターネットによる一般公募を基本に、詩人、文化人による寄稿を組み合わせながら、2006年10月から2007年3月までの半年間をかけて、毎週1詩（3行または5行の詩）を選び、全24詩からなる連詩が編纂されました。

完成した宇宙連詩は、ご応募頂いた作品、関連行事で作成された作品とともに、DVDディスクに記録し、2007年12月に国際宇宙ステーション日本実験棟「きぼう」へ打上保管の予定です。国際宇宙ステーションは、ほぼ世界中から、明るく輝く星としてご覧になれます。「きぼう」には、日本人宇宙飛行士が長期滞在する予定です。地上の人々との対話も可能となります。今回の試みを起点に、軌道上の宇宙飛行士と、世界中の人々とを繋いで、宇宙連詩を持続的に編纂していくことを目指しています。

宇宙連詩

宇宙連詩完成披露シンポジウム

日時:2007年3月27日(火) 18:00~20:00

会場:日本橋HD DVDプラネタリウム

主催:独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)

<http://iss.sfo.jaxa.jp/utiliz/renshi/index.html>

宇宙連詩完成披露シンポジウム

プログラム

- ◎ ごあいさつ — 飯田尚志 (JAXA理事)
— 佐治晴夫 (鈴鹿短期大学学長・宇宙連詩編纂委員会委員長)
- ◎ 宇宙連詩の成果報告 山中勉 (JAXA宇宙環境利用センター)
- ◎ 宇宙連詩の朗読 桜井洋子 (NHKエグゼクティブアナウンサー)
- ◎ 講評 大岡信 (詩人／宇宙連詩進行役)
- ◎ 講演① 宇宙探査の未来 的川泰宣 (JAXA宇宙教育統括)
- ◎ 講演② ことばの未来 谷川俊太郎 (詩人／第2詩寄稿者)
- ◎ 講演③ 世界の連帯 黒川恒男 (独立行政法人国際協力機構アフリカ部長)
- ◎ 閉会

司会: 桜井洋子 (NHKエグゼクティブアナウンサー)

出演者プロフィール



佐治晴夫

1935年東京生まれ。理学博士。東京大学物性研究所、玉川大学教授などを経て、現在、鈴鹿短期大学学長。宇宙研究を平和教育のひとつであると位置づけ、理系・文系の枠を超えたりベラルアーツ教育の実践を行っている。NASAのボイジャー計画やE.T (地球外知的生命) 探査にもかかわる。趣味はパイプオルガン演奏と観世流能など。著書:『夢みる科学』、『わかることはわかること』他多数。



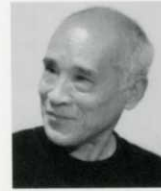
大岡 信

1931年静岡県生まれ。詩人。父 (歌人・大岡博) と窪田空穂の影響で、沼津中学時代に作歌・詩作を行う。一高文科から東京大学国文科卒業。読売新聞外報部勤務を経て、明治大学・東京芸術大学教授をつとめた。詩と批評を中心とした多様な精神活動を行う。近年は、連歌から発展させた連詩を外国人とも試みている。2003年文化勲章受章。2004年フランス・レジオン・ドヌール受章。主な著書『詩への架橋』『折々のうた』(岩波新書) 他多数。



的川 泰宣

1942年広島県生まれ。JAXA宇宙教育センター長。宇宙科学研究本部／対外協力室長・教授を兼務。東京大学大学院時代より科学観測のためのロケット及び人工衛星の飛翔計画の策定に従事し、人工衛星打上げ用ロケットの設計に携わる。また宇宙科学における国際協力の発展にともない、国際協力の窓口となると同時に、広く国民・少年少女に対する宇宙をテーマとする教育・普及活動を行っている。著書に『宇宙は謎がいっぱい』他多数。



谷川 俊太郎

1931年東京生まれ。都立豊多摩高校卒。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』出版。以後詩、エッセー、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。詩集に『ことばあそびうた』『みみをすます』『日々の地図』『はだか』『世間知らず』など、エッセー集に『散文』『ひとり暮らし』、絵本に『わたし』『ともだち』などがある。最新刊は詩集『シャガールと木の葉』『すき』『歌の本』『詩人の墓』など。



黒川 恒男

1952年東京生まれ。慶応義塾大学文学研究科修士課程修了。ジュネーブ大学開発研究所 (旧アフリカ研究所) 修士課程修了。国際協力機構 (JICA) でアフリカ地域の開発事業や青年海外協力隊を担当。1999年から2002年まで、セネガルの首都ダカールに駐在。アフリカを中心に多数の国を訪問。JICAは現在、緒方貞子理事長のもと、155カ国で平和と安全の強化や人々のよりよい生活のため、インフラ整備、教育や保健分野の協力を実施中。



桜井 洋子

1951年新潟県上越市生まれ。1975年明治大学卒業。同年NHK入局。2000年エグゼクティブアナウンサー。「スタジオ102」「ニュースワイド」等朝のニュース番組を7年、「7時のニュース」「ニュース7」等夜のニュース番組を7年担当。その後「首都圏ネットワーク」「日曜美術館」「NHKスペシャル」等を担当。2001年～「たべもの新世紀」、2006年～「ダーウィンがきた」、2007年～「あなたのアンコール」を担当。

第1詩

ほし こ うちゅう こ
われら星の子 宇宙の子
うみ う だいち そだ からだ
海に生まれ大地に育ってきたわたしたちの体には
ひゃくすうじゅうおくねん
はるか百数十億年の
うちゅう れきし きど
宇宙の歴史が刻まれている
きょう ちい ひかり
ほら今日もどこかで小さな光が

やまざき なおこ
山崎 直子(宇宙飛行士)

プロフィール

1970年千葉県生まれ。東京大学工学部卒業、同大学航空宇宙工学専攻修士課程修了。1996年よりNASDA(現JAXA)に勤務し、「きぼう」日本実験棟のシステム・インテグレーション(開発業務)に従事。1999年、NASDAより国際宇宙ステーション(ISS)に搭乗する日本人宇宙飛行士の候補者に選定された。2006年「きぼう」日本実験棟の打上げミッションについて、クルーサポートアストロノート(搭乗者支援宇宙飛行士)として選定される。

コメント

小学生の理科の授業のとき、私たちの体をつくっている成分は、星を作っている成分とほとんど同じであることを知り、とても感動しました。星と私たちは同じものでできている、私たちが宇宙の一部、ということを知り、宇宙をとて身近に感じました。また、長女の出産は、生命の神秘さを教えてくれました。超音波で見る胎児の成長ぶりは、生命の進化の歴史を凝縮しているようでした。私たちの体には、そうした地球の、そして遥か宇宙の百数十億年の歴史が刻まれているような気がします。

第2詩

じゅうしょ むら まち けん くに
住所は村ではない 町でも県でも国ですらない
じゅうしょ わくせい ぎんがけい
住所はこの惑星 そして銀河系
ひかり やみ いだ
光にみちびかれ 闇にひそむエネルギーに抱かれて
たにかわしゅんたろう
谷川 俊太郎(詩人)

プロフィール

(プロフィールは、出演者の欄を参照)

コメント

少年のころから自分は日本の子であると同時に、地球の子であり宇宙の子だと思っていますから、山崎さんの5行にすんなり付けることができ、可視の光に対して、不可視の闇にひそむエネルギーを出すことで、次への展開を目指しました。

第3詩

たいへいよう かいゆう む
太平洋を回遊するカツオの群れも
すな け か さ あし
砂を蹴って駆け去るキリンの足も
い うご こだう
生きるとは 動くこと 鼓動すること。
パオ バオ いまたんじょう あか
モンゴルの包のフェルトが 今誕生した 赤んぼの
げんき な こえ こだう
元気のいい泣き声に 鼓動している
おおおか まこと
大岡 信(詩人)

プロフィール

(プロフィールは、出演者の欄を参照)

コメント

前詩の「闇にひそむエネルギー」を受けとめ、「生きる=動く」ものへと展開させた。海、陸とめぐる視線は、モンゴルの平原のパオへと舞い降りる。そこで赤ん坊の鼓動を通して、次へ開こうとした。

第4詩※

ひろ くうかん
広くはてしない空間に
ぐうぜんたんじょうした
ぼくはどうしてここにいるの

あさの しゅん(小学2年生/8歳)

プロフィール

1998年4月13日生まれ。8歳。文京区在住。小学校2年生。宇宙連詩に入选し、2006年12月20日の読売新聞朝刊二面「顔」に掲載。2006年、第6回ミュージエスタ(谷川俊太郎選)にて、詩「おつきさま」が、「俊太郎のお気に入り」に入选。同年、明治記念総合短歌大会(第114回、115回)にて秀逸賞を受賞。

コメント

大好きな毛利さんに会いに行ったら、それが宇宙連詩のシンポジウムでした。前の三詩のお話をきいて、おもしろいなどと思って、うちに帰ってすぐかきました。ぼくは、広い宇宙の中の、地きゅうの中の、今ここにいるのは、すご〜くぐうぜんなんだって思います。なぜかという、宇宙の何かがちよっとでもちがっていたら、ほかの星に生まれたかもしれないし、お父さんやお母さんに会えなかったからです。そう思ったらジーンとしました。

第5詩

そりゃ わかってるサ!
うんめい かみさま き い
運命の神様のお気に入りだから
かみ そば し かお
神は いつでも傍にいて 知らぬ顔サ
と す
さあ、飛んでごらん! 好きなのに
こころ ほし きぶん
でも心はドキドキ 星がピカピカって気分

しらいし
白石 かずこ(詩人)

プロフィール

1931年カナダ生まれ。10代後半に、北園克衛の雑誌「VOU」に参加、モダニズム、シュールレアリスムの世界に触れる。早大在学中の51年に詩集「卵のふる街」でデビュー。70年「聖なる淫者の季節」でH氏賞受賞。ヨーロッパ、アメリカ、アジア、中南米と、世界各国の詩祭・芸術祭・作家会議に招待され、ポエトリー・リーディングのパフォーマンスを行う。世界各地への旅行や各国の詩人との交流に触発された詩も多く発表している。

コメント

あさのしゅんくんの心に広い空間にいきなりなげだされたような不安を感じたので、元気に陰陽の陽の世界へさそいだそうとしたのです。陽の世界は希望、よろこびにつながります。

第6詩※

いちにのさんつ 未知なる世界へ飛び出そう
 りく そら よる あさ やみ ひかり
 陸から空へ 夜から朝へ 闇から光への ロングジャーニー
 きつとどこかで僕を待つ まだ見ぬ君に会いに行く

たんつう(研究者/29歳)

プロフィール

1977年8月29日生まれ。愛知県豊橋市(530運動発祥の地)出身。料理人や宇宙飛行士を志すもあえなく挫折。現在高知県にて、ポストク研究員として「地震と断層」という地球の魔物と格闘する日々。初めて「詩」の洗礼を受けたのは、中学卒業記念に担任の先生からいただいた「どきん」(谷川俊太郎作)でした。

コメント

応募した詩は、前の二人の言葉のやり取りを大切に、また声に出して読むことを意識して心地よいリズムに乗るように心がけて作りました。親友と競い合い、講評しあいながら楽しんで応募することができました。若干8歳の「しゅんくん」が入選したことへの嫉妬心が創作意欲をかき立てたのも事実です(笑)。つくば出張の移動中、上野駅で手にした朝刊の地方欄に載っていた「宇宙連詩」の文字が偶然目に留まったのが何かの縁でした。

第7詩

つき りょこう
 月へのバック旅行
 ガイドさんが にこやかに語りかける
 たけとり げんき
 竹取の じじ ばばは 元気かしら
 あお うみ かがや みどり やさ ひと
 青い海 輝く緑 優しい人
 なつかしいわ あの星が

なかむら けいこ
 中村 桂子(JT生命誌研究館館長)

プロフィール

1936年東京生まれ。東京大学理学部化学科、同大学院生物化学専攻博士課程修了。理学博士。三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室長、人間・自然研究部長を経て早稲田大学教授。生命誌という新分野を提案、生命誌研究館を創設し副館長、2002年館長となり、現在に至る。主な受賞に毎日出版文化賞(「自己創出する生命」/哲学書房)、松下幸之助花の万博記念賞、第15回ダイヤモンドレディ賞、オメガ・アワード2002など。

コメント

まだ見ぬ君に会いに行く。私も宇宙へとび出したいくなりました。すぐに”少年たちを乗せて銀河を駆け抜ける列車、小さな星で一本のバラを育てる王子様”というフレーズが浮かび、心は宇宙にとびました。でもそこで待てよと思ったのです。私の今いるこの星も宇宙の中、これをこんな状態にしたままでとび出してよいのかなと。そして、宇宙に浮ぶすばらしい星、地球を見つめました。詩人じゃないですね。

第8詩※

ほし
 星はぼくらのゆりかご
 しんぞう と
 ぼくらの心臓 —— そこからぼくらは跳びたつた
 でも、なぜ?

フランク・ホーガン Frank Hogan(作家/40歳/アイルランド)

プロフィール

1966年スウェーデンに生まれる。スウェーデンとフランスで教育を受ける。宇宙航空エンジニア。スウェーデン、オランダ、ドイツで勤務。現在は作家としてアイルランド在住。「アポロ21」「運命」の2冊を出版。ウェブサイト: <http://www.frankhogan.net>

コメント

この詩は人間の魂の重要性について思いをめぐらしたのですが、二人の宇宙のバイオニアに捧げられてもいます。「ゆりかご」はコンスタンティン・ツィオルコフスキー(宇宙飛行の父)に、「跳ぶ」はニール・アームストロングが初めて月の表面におりたつたときに言った言葉にインスピレーションを得ました。宇宙連詩のことは、国際宇宙大学の同窓生に教えてもらいました。宇宙連詩は様々な人が考えを表現する、素晴らしい知的冒険です。

第9詩

の
 ゆりかごに 乗って
 はる ひがん む
 遥かな彼岸に 向かおう
 ひがん とお
 彼岸は 遠い
 こんなん う か
 困難に 打ち勝って
 ぶじ つ
 無事に 着こう

ふじた よしお
 藤田 良雄(天体物理学者/98歳)

プロフィール

1908年福井県生まれ。東京大学名誉教授。専門は天体物理学、とくに低温度星の分光学的研究を半世紀以上にわたって続ける。日本学士院会員。1994年から2期6年間、日本学士院長をつとめる。1996年に文化功労者、1999年には歌会始の召人として、ハワイ・マウナケア山に建設された国立天文台のすばる望遠鏡の歌を詠んだ。

コメント

「ゆりかご」の話から快適な乗り物を連想しました。昔、郷里福井で見た「いずめ」を思い出しました。円い形で、やわらかなわらでできたゆりかごです。

第10詩※

ちい ばく およ つ
 小さな僕はついに泳ぎ着いたんだ
 かあ なか なか
 お母さんのお腹の中に
 そこからがまた、はじ 始まり

akihito uezato (本名・^{うえざとあきひと}上里彰仁) (精神科医/33歳/米国在住)

プロフィール

東京生まれ。沖縄を故郷と考える。幼少時代は東京で過ごす、後に両親の故郷である沖縄に帰郷する。東京大学入学を機に上京、工学を志した後、生命・人間について追求すべく、卒業後、東京医科歯科大学医学部に進学。沖縄での病院勤務を経て、2004年より米国アラバマ大学にて精神科医として勤務している。

コメント

詩の中の「僕」は生物における精子、人間社会における我々一人一人、そして宇宙における生命を表していて、3つそれぞれの次元で繰り返し宇宙の歴史を形成しています。生命や人間・宇宙のことに思いを馳せるとそんな世界観が芽生え、気の遠くなるほどワクワクしませんか？この世で生きていることが楽しく思えてきます。私達の分身である連詩が国際宇宙ステーションに乗って地球を回るといのもとてもロマンがあります。

第11詩※

なか なか ま くら
 お腹の中は 真っ暗だ
 がんばって 光るものをさがすんだ
 み みた みた にぎ
 見つけた 見つけた 握ったら
 そこは ほくの生まれ故郷
 どこもかしこも光でいっぱいだった

げんせき はるか(小学4年生/9歳)

プロフィール

1997年1月25日東京生まれ。幼少時代に北海道で3年間過ごしました。だから、とうもろこし・いくら・ツブガイ・ししゃも・が好き!杉並区立松庵小学校4年生。生き物が好き。おしゃべり。読書や詩を作るのが好きです。

コメント

前の詩の「お腹の中」を入れました。お母さんのお腹の中から生まれる時のことを考え、思いついたとおりに書きました。自然に言葉が浮かんで来て、どんどん口から出てきました。生まれる時って、生まれるぞっでもがきながらまわりの明かりを握る、と感じ、この詩を作りました。[応募した理由]宇宙連詩のシンポジウムに参加しました。母が宇宙連詩を書いていたので一緒に応募しました。

第12詩

りょうがんびしょう かえる
 両眼微笑の蛙*くん
 はんがんびしょう
 半眼微笑のほとけさま
 かため
 片目つむってウィンクするほく

くさのしんべい し
 *草野心平の詩より

たかはし じゅんこ
 高橋 順子(詩人)

プロフィール

1944年千葉県生まれ。東京大学仏文学科卒業。出版社に勤務しながら第一詩集『海まで』刊。おもな詩集に『時の雨』『貧乏な椅子』『どろろくんさま』。連詩集『からすりの花』(新藤涼子・吉原幸子)、『百八つものがたり』(三木卓・新藤涼子)、『地球一周航海ものがたり』(新藤涼子)。評論『連句のたのしみ』、エッセイ集『草しずく』、ファンタジー『月光人魚伝説』など。

コメント

草野心平の詩に、「冬眠を終へて出てきた蛙」という題名で、本文は「両眼微笑」とあるだけの詩があります。そこから引用しました。「光でいっぱい」というのを受けつつもです。

第13詩

ウィンクすると きみ りょうめ と
 君は両目が閉じちゃうね
 でも き 気にしなくていいんだよ
 きのう できなかつた すべ だい
 昨日 できなかった滑り台
 きょう 今日 ちゃんとできるでしょ
 生きてるって そういうことさ

かわせ げん
 川瀬 源(教員/49歳)

プロフィール

1957年東京生まれ。東京都公立中学校主幹(理科教員)。1997年にスタートしたコスミックカレッジに講師として協力、授業の企画立案や教材開発等を行う。1998年「少年少女月探査シンポジウム」オープニング映像のためのイメージポエム寄稿。1999年NASAスペースキャンプエデュケーターコース修了(優秀受講生賞受賞)。日本科学技術振興財団主催「青少年のための科学の祭典」や科学技術館「サイエンス友の会」に実験講師として協力。

コメント

第11、12詩を「いのちの光が降り注ぎ、混沌から生命が誕生した。」と受け、子が成長する姿にいのちあるすべてのものの成長や進化を投影させた。宇宙の始まり。恒星や銀河の誕生。惑星の誕生。そしていのちの誕生。原始の生命がいくつものデザインを試し、環境に選ばれながらも、さまざまな機能や能力を獲得し、進化したいのちを繋いできた姿、宇宙といのちそのものに思いを馳せた。素材は娘と妻の会話。娘の成長が宇宙連詩の一詩を綴ってくれたことに感謝したい。

第14詩※

そうだったんだ！と 僕は水面から跳ね上がった
 上空を渡り鳥たちがはばたいていく
 地磁気を道しるべに また半年後に来てなあー

itoton-1 (いととんいち [本名:西嶋 純一]) (会社員/48歳)

プロフィール

1958年富山県生まれ、東京都育ち。現在、神奈川県厚木市在住。職業は会社員(電子部品の研究開発と信頼性)。学生時代は一貫して物理学を専攻したので宇宙や物質には思い入れがある。また、子どもの頃からどんな生き物も大好き。いま一番何とかなしたいのは人類による地球環境破壊。

コメント

自作は「生物のダイナミズム」を表現しました。はっと思っただけで跳ね上がったのは魚でもあり自分でもある。渡り鳥は、水中で誕生した生命が陸上・空中にまで生活圏を広げながら進化したことの象徴イメージ。そして、地磁気や天体周期なども鋭敏に感じ取る生物の驚異的能力にエールを送りました。宇宙連詩は2003年代官山シンポジウムを聞いたことがきっかけです。子供の頃、詩のノートを作っていたことを思い出しながら楽しみました。

第15詩※

ふと見下ろすと、僕の生まれた街が見えた
 凧揚げをした河の三角州で 子供たちがフナ釣りをしている
 土手で少年が 初めて補助輪無しで自転車を走らせた
 少女は砂の上のタイヤの跡を じっと見つめている
 僕は決してそこに舞い降りたりしない

羽熊 幹太(文化財保存修復家/34歳)

プロフィール

1972年11月13日漆の日生まれ。京都市左京区出身。ドイツ・ヒルデスハイム在住。文化財保存修復家。子どもの本(絵本・児童文学)の専門店を営む絵本好きの母に育てられる。絵と言葉の日々。絵を描くことが好きで美術大学へ入学、大学院まで進む。美術・芸術に関わる仕事を探しに渡独。文化財保存修復の魅力にひきつけられ現在に至る。

コメント

詩のなかの情景は全て、今も鮮明に残る幼いころの記憶です。14詩の「上空の渡り鳥」から連想し、空からの視点にしました。「そこ」は「その頃」という取り戻せない過去を暗示しています。宇宙連詩は、Mixiの谷川俊太郎氏のコミュニティで紹介されていました。僕は子どもの頃から、何かテーマやきっかけを与えられ、すぐに自由な想像力で絵や言葉を創ることが出来ました。宇宙連詩もその「きっかけ」になってくれたのです。

第16詩

国境の街古都コロンで以来
 よくコロブようになった その度に重力！を思う
 先日 コロンだおかげで枯木に梅一輪を見た

新藤 涼子(詩人)

プロフィール

鹿児島県生まれ。宮崎県出身。旧満州にて1歳から9歳まで育つ。詩集に「薔薇族」、「ひかりの薔薇」、「薔薇ふみ」(高見順賞)、「薔薇色のカモメ」、連詩集「からすりの花」、「百八つものがたり」、「地球一周航海ものがたり」(連詩集は3冊とも高橋順子との共著)など。歷程同人。日本現代詩人会、日本文芸家協会会員。静岡県熱海市在住。

コメント

コ音を多用することで面白みを出そうとした。重力は、じぶんの肥満と地球の重力を重ねた。前の詩の一行目、街、からこの詩行を使ったが、先日、地球一周をしたときの実体験でもある。梅一輪を見たのも実体験である。転ばなければ見つからなかった。

第17詩※

重力にしたがい
 雲海を潜水艦のように沈んで
 着いたところは上海
 人の海 つらなるビルの絶壁
 ふと見やると 竹ざおにふとんが干してあるよ

座敷 翁(中国研究者/48歳)

プロフィール

1958年生まれ。本籍岡山、生地は神戸、育ったのは東京が長いです。東京都世田谷区在住で、現代中国政治の研究教育を職業としています。小学生の時に父の仕事の都合で豪州に、大学院時代は英国に、そして自分の仕事で香港と中国と米国に、合計15年住んだことがあります。できれば他の星にも行ってみたいと思います。

コメント

宇宙連詩についてはJAXAの方から教えていただきました。これまで詩を作ったことはほとんどありませんが、子供の頃から作文は好きでした。「ベトナムの夕日の中を、今日もB52がカラスのように飛んでいく」などと中2の時に書いた記憶があります。今回選ばれた詩は、上海へ出張した際の見聞をもとに作りました。近代的なメトロポリスの内側には、生身の人間の暮らしがありました。

第18詩

りっしゆん ひ かぜ なか しろ かわ
 立春をすぎた日の風の中、白いシャツが乾く。
 なんせい とお ふ じ さん おうぎ かたむ
 南西に遠く富士山の さかさ扇が傾く。
 そういえばそろそろ「小学校の昼餉どき」

おかい たかし
 岡井 隆 (歌人)

プロフィール

1928年名古屋生まれ。歌人。慶應義塾大学医学部卒。「アララギ」を経て「未来」創刊に参加。現在同誌編集・発行人。歌集に「禁忌と好色」(釈道空賞)、「親和力」(斎藤茂吉短歌文学賞)、「ウランと白鳥」(日本詩歌文学賞)、「ヴォツェック/海と陸」(毎日芸術賞)、「馴鹿時代今か来向かふ」(読売文学賞)、「岡井隆全歌集」(全4巻)。評論・エッセイに「岡井隆コレクション」(全8巻)、他。

コメント

前作に、「ふと見やると 竹ざおにふとんが干してあるよ」とあり、上海の市内のビルの屋上かなんかの景色を思いました。わたしの家のベランダには「白いシャツ」が干してあったので、それを受けてみました。あとは、その日の目についた風景です。

第19詩※

ふか くら うみ そこ
 深く 暗い 海の底で
 あおしろ ひか きょだい おも
 青白く光る 巨大イカは思う
 ほん あし
 10本の足なんかより
 とり はね
 鳥のような羽があったら
 かぜ おおぞら と まわ
 風をきって 大空を飛び回るのにと。

たかはら1045 (小学生/12歳)

プロフィール

1994年、母の実家のある山口県生まれ。2歳から4歳の2年間北京、小学校5年生の1年間、今話題の、ボストン近郊在住。現在、もうすぐ小学校卒業の12歳。中学校に向けて、勉強の中でも、特に英語に力を入れて、準備をしている。

コメント

私は、父を通して宇宙連詩のことを知り、父に勧められて宇宙連詩に応募してみました。私の詩は「白」という色をイメージしたところ「イカ」がうかんだので、イカの気持ちを考えて作りました。初めての応募で、当選したので、自分でも正直言ってびっくりしました。私もとてうれしかったのですが、実は、父が一番喜んでいました。

第20詩※

きみ ゆめ ぼく まんり たび さそ
 君の夢が 僕を 2万里の旅に誘う
 わた ぶね うえ きみ てがみ ろうどく
 渡し舟の上で 君の手紙を 朗読しよう
 み はる かなた とも つた おお こえ
 まだ見ぬ遙か彼方の友へ 伝わるほど大きな声で

Picard (研究者)

プロフィール

人類初の人工衛星が地球を周回した翌年に生まれ、アポロ11号の月着陸や映画「2001年宇宙の旅」に衝撃を受け育ちました。現在は、人文社会系の研究に従事しています。大岡信さんが「連詩」とおとして、多様な社会を繋いでこられたことに共感を覚えます。「宇宙連詩」を皆で創り続けることで、私たちが、これから目指すべき道標を言葉として発見していくことに、期待しております。

コメント

たからはら1045さんの、生き生きとした「巨大イカ」のアイデアから、ジュール・ベルヌの「海底2万里」を連想しました。「月世界旅行」で、冒険心、挑戦心、探求心に火がついた若者達が、現在の宇宙活動を切り開きました。私や私の世代は何を遺すべきなのか?を、改めて考えさせられました。前世代と次世代を繋ぐ者として、「バオバブの木」を発見する努力を続けたいと思います。

第21詩

みみ
 耳をすませば きこえる
 と おと
 あれはコウモリの飛ぶ音
 ぐんじょう ねったい よる
 群青のオイルのような 熱帯の夜を
 か ふん ほこ
 バオバブの花粉を運んで
 と おと
 コウモリの飛ぶ音

こじま
 小島 ゆかり (歌人)

プロフィール

1956年愛知県生まれ。早稲田大学文学部卒。大学在学中に歌を作りはじめ、コスモス短歌会入会。宮柊二に師事。1993年より二年間渡米。コスモス選者、産経新聞選者、毎日新聞書評委員、放送文化基金審査委員など。歌集に「希望」(若山牧水賞)、「憂春」(道空賞)など。エッセイ集に「蛍の海」、「うたの観覧車」。評論集に「高野公彦の歌」。入門書に「今日よりは明日」、「俳句吟行入門〜私の武蔵野探訪」など。

コメント

「まだ見ぬ遙か彼方の友」——それは、わたしかもしれないとおもうとき、どこか遠くから声がきこえるような気がします。そして「耳をすませば きこえる」……。だれかの声も、コウモリの飛ぶ音も、かけがえのないものを運ぶ宇宙の振動です。

第22詩※

みなみ しま よる ちへいせん あいまい
 南の島の夜は地平線すら曖昧になる
 みちぞ くさ つづ あお みちのり
 道沿いの草むらに続く青い道程は
 ふゆ さ しめ ほし かつそうろ
 冬のホタルが指し示す 星への滑走路

えんどう やすひろ
 遠藤 康弘 (大学兼任講師 / 35歳)

プロフィール

1971生まれ。東京都出身、あきる野市在住。武蔵野短期大学、武蔵野学院大学兼任講師。主な著書に『植物の世界』（朝日新聞社:共著）、『Flora of Japan』（講談社サイエンティフィック:共著）がある。

コメント

以前、琉球大学の招聘を受け、西表島で研究をしていたとき、冬に成虫になる「オオシママドボタル」というホタルがいることを知りました。雌は羽を失いながらも草むらでけなげに光っている姿が美しく見えました。宇宙連詩のwebを偶然見つけたとき、その使われた写真がとても美しかったので、私も是非参加したいと思いました。

第23詩※

さあ、いま ぐんじょう せかい と た
 今すぐ群青の世界へ飛び立とう
 やみ おそ かん
 その闇は畏れを感じるためだけでなく
 みちび ひかり かん
 導く光を感じるためにあるのだから
 そら
 空はどこまでもつながっている
 きみ だれ みちび こうせい
 いつか君も誰かを導く恒星となるだろう

いいづか はやと
 飯塚 逸人 (コピーライター / 37歳)

プロフィール

現在、コピーライターとして(株)日本デザインセンターに勤務。自動車メーカーの新聞広告・雑誌広告・カタログ、ショッピングセンターの年間キャンペーン(ポスター・ラジオCM)などを担当。

コメント

第22詩で「星への滑走路」を用意していただいたので、第23詩ではそこから飛び立つしかないと思って書き上げました。『自分自身が宇宙へ行くことは難しいと思うが、自分が書いた詩が宇宙へ飛び出すことができればどんなに素晴らしいことだろう』。宇宙連詩に応募する動機となったそんな思いを込めました。

第24詩

そこ そら ちきゅう ほし
 底なしの空のどこかに 地球そっくりの星がいくつあろうと
 わたし わら し ひかり じゅうりょく ぼ ひと
 私たちがそこで笑い そこで死ぬ 光と重力の場は一つだけだ
 なか ひと ちい うちゅう
 めいめいの中に一つずつ 小さな宇宙をかかえたまま

あんどう もとお
 安藤 元雄 (詩人)

プロフィール

1934年東京生まれ。東大卒。フランス近代詩専攻。明治大学名誉教授、日本現代詩人会会長。詩集に『水の中の歲月』（1980高見順賞）『夜の音』（1988現代詩花椿賞）『めぐりの歌』（1999萩原朔太郎賞）『わがノルマンディー』（2004現代詩歌文学館賞、暦程賞）など。2002年紫綬褒章を受ける。翻訳にボードレール『悪の華』、グラック『シルトの岸辺』、ベケット『モロイ』、シュベルヴィエル『詩集』など。編纂に『堀口大学全集』『北原白秋詩集』など。

コメント

連詩を締めくくるのは結構むずかしい。すぐ前の詩だけではなく、これまでに書かれた23篇の詩のすべてを受け止めなければならない。23人の作者がそれぞれ目いっぱいに扱った想像力を、あえてもう一度、個々人の心の問題に収斂させることで、かろうじて責任だけは果たした、という格好だ。

※は公募により選定された作品です。のべ約800名の方々にご応募いただきました。ありがとうございました。

宇宙連詩

主催:独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA) | 企画:宇宙連詩編纂委員会 / 委員長:佐治晴夫(鈴鹿短期大学学長) / 委員:大岡信(詩人)、室山哲也(NHK解説委員)、井口洋夫(JAXA顧問)、的川泰宣(JAXA宇宙教育統括) / 幹事役:北川フラム((株)アートフロントギャラリー代表) | 進行役:大岡信 | 翻訳:ジャニー・バイチマン(大東文化大学教授) | 写真監修:渡部潤一(国立天文台天文情報センター長) | Webデザイン:777Interactive

発行:独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA) 〒305-8505 茨城県つくば市千現2-1-1 TEL:029-868-3604
 編集:宇宙連詩事務局((株)アートフロントギャラリー内) 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町29-18ヒルサイドテラスA TEL:03-3476-4868
 発行日:2007年3月27日